

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (10)

—А.И. Черепанов: Записки Военного Советника
в Китае—を中心として

滝 本 可 紀

On the Role of Military Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (10)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

This time, Chiang Kai-Shek decided to mark the beginning of the Second Eastern Campaign with the storming of Weizhou. On 13 October the artillery opened fire. The first 8-10 soldiers reached the wall, but were shot down before they had time to raise the ladders. Only the company political officer with the colours in his hands remained unhurt at the wall. Backed by fierce machine-gun fire, the soldiers set up the first bamboo ladder which was slowly but surely ascended by a rifleman in a broad-brimmed straw hat. At 4:10 p.m. the banner was on the wall.

By the end of 1925 the enemy had been cleared out of the southeastern part of Guangdong. In January 1926, government troops occupied Hainan Island. During the Second Eastern Campaign people gave full and unconditional support to the National Revolutionary Army.

1924年10月、広東革命政府は香港政府と手を結んでいた広州商団の私兵を鎮圧することにより、広州市内での権力を完全に握った。次いで、広東軍閥陳炯明との戦いが1925年、1月に始まった。この間、孫文は北京で北方軍閥張作霖、段祺瑞等と会見をしつつも、遂に当地で病死した。それにも拘らず、第一次東征は成功し、それによって陳炯明の勢力は広東省から一掃された。彼等は江西、福建省へ逃れた。

しかし、革命政府の有力な軍隊が広州に不在なるについて、もともと広州政府の一員であった楊希閔と劉震震がクーデターを起こした。東征軍は5月、党代表廖仲愷が汕頭に来て、軍事会議を開いた。そこで、潮州、梅県を放棄し、全力をあげて広州のクーデターを鎮圧し、内外の反革命勢力を広東から追放することを決定した。

この間に上海の日本紡績工場事件及び英国租界軍警

によるデモ隊に対する射殺事件が起こり、それは中国全土に大きな反対運動を巻き起こした。6月23日、広州に於いても上海の事件を支援するデモが行われ、黄埔軍校の生徒も何応欽に率いられて参加した。これに対しても英国兵は沙面の租界から発砲し、多数の死傷者が出た。

広州のクーデターは完全に鎮圧され、唐繼堯の軍も敗れ、広州は完全に革命の根拠地となった。

革命軍が広州に帰っている間に、陳炯明の軍隊は又もや広東省東部に進駐し、威を振った。

それと機を一にして、政府内の一部の人々が廖仲愷を狙撃した。蒋介石はこれを利用し、革命軍の実権を手に入れ、以後、広東政府の中で最高の実力者となっていく。

陳炯明の軍隊は潮州、梅県に止まらず、海豊、陸豊にまで進出して来た。南方に於いても鄧本殷が広州を狙っていた。

広州政府は今までの党軍を国民革命軍と改称し、広

東省全域を革命の根拠地に変えようとして第二次東征を行なった。その最初に立ちはだかったのは難攻不落と謳われた惠州城であった。

だが、血戦の後遂にこれも占拠し、東征軍は更に進撃を続け、広東省一帯は完全に平定された。これによって政府の財政状態は大いに改善され、軍の士気も上がり、北伐が具体的問題として考えられるようになった。

以下は東征軍軍事顧問である А.И. Черепанов の回想録《Записки Военного Советника в Китае》1976. НАУКА の 288 頁～334 頁の全訳であり、これに関して、中国太原市、山西大学張安琪教授に多くの教示を受けたことを記し、ここに厚く御礼を申し上げる。

惠州城強襲

第二次東征が始まるまで、革命政府は陳炯明の軍隊の兵員が3万を超えると考えていたが、実際は約2万5千であった。当時の中国的条件ではその軍隊は十分に補給を受け、武装されていた。軍の中核を成すのは、相変わらず林虎及び洪兆麟將軍の軍隊で、その兵員は1万1千乃至1万2千であった。これらの部隊は第一次東征の際すでに、国民革命軍に対して頑強に抵抗していた。

陳炯明は10月1日までに潮州、汕頭、揭陽を占拠し、海豐、河婆、五華の線に進出した。

陳炯明は広州攻撃の計画を立てていたが、それは特別に目新しいものではなく、第一次東征前の彼の意図と大差なかった。それは基本的に次のようにまとめることができる：林虎將軍の右縦隊は龍川を越え、東江を下り、河源——博羅——增城へ進出する。李易標將軍の中央縦隊は河婆地区から惠州と石竜に進出し、そこで広州攻撃のために右縦隊と合流する。洪兆麟將軍の左縦隊は海豐地区から淡水へ、更に虎門へ進出する。予備部隊は中央縦隊の後方に位置する。

国民革命軍司令部は陳炯明の意図をよく知っており、それらを考慮に入れて第二次東征に向けての詳細なプランを作成した。そしてそれを遂行するために、兵力を次のように分けた。

第1軍——兵員6000；

第4軍——(第10、第12師団を除く)兵員6000。顧問 Ф. Сахновский；

三水グループ(第4、第9旅団)——兵員3000。顧問 С. Шнейдер が任命された；

吳鉄城の第1独立師団——兵員1500。顧問 Е. Тесне-

нко；

程潛將軍グループ——江西、河南、湖北部隊から成る第6軍。兵員約6000。顧問 Кончиц；

その他の顧問は次の通りであった：第1歩兵師団——Черепанов、第3——Панюков、第4連隊——Шевалдин。

第二次東征総司令官として、追放された許崇智の代わりに蔣介石が政府によって任命された。彼の顧問——В.П. Рогачев。

広東の南西地区では、鄧本股將軍に備えて、陳銘樞將軍の第10師団及び廖 fu shin 將軍の第12師団を残した。後者はあまり当にならない師団で、間もなく敵に寝返った。

広州の北方防衛は第2軍及び第3軍に委ねられた。

市中防衛のために、王 liu zhong 將軍指揮下の守備隊、海軍及び李福林將軍の第5軍が残された。信頼できない將軍達の中でもとりわけ彼が信頼できないことはよく知られていた。

В.К. Блюхер がいなくなると、第二次東征の戦略及び作戦準備に対する顧問達の影響力は著しく弱まった。今や、主要な役割を演ずるようになったのは蔣介石であった。

第一次東征の時すでに、惠州城は蔣介石を渦巻のようにつけていた。彼はいかなる代価を払ってもここを占拠しようとしていた。その時は В.К. Блюхер がそれを阻止した。そして後に確認されたように、彼は正しかった。今回、蔣介石は惠州強襲を東征開始の記念にしようと決めた。しかし、今回もまた、それは特に必要なことではなかった。惠州強襲の後、更に五華、興寧、梅県に主要な攻撃を加えることに決めた。その理由は、第一次東征の際起ったように敵が福建、江西両省に退却するのを防ぐ為であった。

惠州はどんな中世的な城にも見られるように、伝説的な栄光に輝いていた。惠州は存在していた2000年の間、包囲軍が何度も強襲を試みたけれども、一度も占拠されたことがなかったという噂が根付いていた。確かに、あらゆる伝説がそうであるように、この伝説の中にも若干の真理が含まれていた。最近の軍事的体験がそれを裏付けている。古い軍閥型の南中国軍がもし再組織によって国民革命軍に改造されていなかったなら、また我々顧問団によって再教育がなされなかったなら、事実、惠州を占拠することはできなかったであろう。

1922年、孫文の直接指揮する3万から成る軍隊が惠

州を包囲攻撃した際、そのことが極めてはっきり実証された。当時、その作戦に飛行機3機が加わり、約100個の爆弾を城に投下した。南東門地区では、イワン雷帝がカザンを占拠した時と同じように、城壁に向かって地雷用の坑道が掘られ、100mに渡って壁が崩壊した。しかし、敵は崩壊した場所に丸太の柵を作って惠州を保持した。

勿論、惠州が難攻不落であるという考えは当地の軍閥によって広められたものであった。その結果、帯電した鉄条網があること、城壁の下には秘密の通路があること、その他これに類似した馬鹿げた臆測を多くの人々が信じていた。一方、国民革命軍司令部も惠州について明確な情報をもっていなかったことは事実であった。

もっとも、詳細で信ずるに足る情報が手に入っただけで、第一次東征中に広西軍がこの城を包囲攻撃し、不成功に終わった時であった。

この5年間、惠州を支配していたのは楊坤如で、彼は最近まで山賊であったが現在は軍閥の下で將軍になっていた。彼は付近の地主であると同時に山賊でもある徒党と密接な結びつきを持っていた。そして、8月に国民革命軍によって武装解除された許崇智將軍の広州軍の残存部隊を、自分のところに匿った。

彼が抵抗を続けるか、あるいは中国軍閥の伝統的精神に則って、適当な条件で相手方に付くのか、長い間ははっきりしなかった。ともかく、惠州攻撃の命令を下した次の日の10月7日になっても、蔣介石は政府の名で楊坤如に電報を送り、国民革命軍側に移って白芒花地区へ軍を徹退させるよう、彼に勧めた。この電報は恐らく、この將軍の心の中に、この城が難攻不落であるという伝統的な、当にならない信念を強めさせたにすぎなかったであろう。

軍が集中する前に、何応欽をチーフとする中国側の将校グループが砲術顧問 Бесчаснов、Гилев、機関銃関係顧問 Палло、工兵顧問 Яковлев と一緒に、私の指揮の下で全く援護部隊をもたず、ランチに乗って偵察に出かけた：惠州城から1~1.5kmの所で上陸し、高地に登ってより近くまで進んだ。双眼鏡を通してよく見たのはただ城壁の北西部のみであった。我々が特に注意を向けたのは西側の城壁に沿って伸びている人工湖、そして北門の向かい側にある東江との間の狭い帯状の土地であった。それは城壁の南西部分を強襲するための主要な進路として、確かに後に役に立った。

惠州城——市は東江の左岸にあり、その支流西枝江

によって二つの部分に分かれている。両者とも高さ約8m(所によって10m)、厚さ6~9mの城壁によって6kmの長さで囲まれていた。城壁の外装と身長ぐらいの高さの胸壁は石造りで、さらにその後には土塁が続いていた。敵は胸壁の銃眼を砂袋で強化し、それによって小銃や機関銃の射撃に役立たせようとした。市の中へは鉄が張られた7個の木製の門を通して入ることができ、その上には望楼が聳えていた。包囲攻撃を前にして、それらの門は太い丸太で支えられ、束柴と土が積み上げられていた。東惠州は三方が河に面し、残りの一方は壕——巾7~8m、深さ4m——に面していた。西惠州は北が東江、東が西枝江、南が壕、西が徒歩のできない湖で守られていた。堤が湖を横切るように数個所門の方へ延びていた。湖と東江との間にある大きな高い北門の所だけに、巾200~300mの細長い土地が開けていた。その中央、城壁より約50~80mの所に水路が通じており、増水の時には湖から余分の水が排出された。

最初の偵察の際、我々はこの狭い帯状の土地を主要な攻撃のための橋頭堡とすることに決めた。ただし、軍が城を包囲し、詳しい調査を行った後、そのことを最終的に決定することになっていた。

この城が難攻不落だという思いは確かに、将校達だけでなく司令部の連中にもずっと重くのしかかっていた。その事は表面的には、敵を野戦で撃滅する方が良いのではないかという議論や、寒い季節だという不平、毛布が無いことに対する不平等々の形で表われていた。第4連隊長劉大佐のような最高のエリートでさえもこれらの疑惑に屈し、ひどくいらいらしていた。しかし、これら全ての事の裏には二つの事情があることを認めなければならない：第1に、惠州強襲は第一次東征の時と同様に実際は、必ずしも行う必要のないことであった。第2に、総司令官蔣介石自身、明らかにためらっていた。

惠州攻撃の指令が初めて10月6日、彼の展望車の中で全体的な形をとって出された。しかしこの際、次の事を注意しておかねばならない。即ち、指令の原案に対して顧問 В.П. Рогачев がただちに重大な修正を加えたことである。その第1は作戦の成功に大きな役割を果たした砲兵隊の編成に関する事であった。

しかし、この後10月12日の朝に至るまで、兵力の集中のためになすべき重大な作業があったにも拘らず、蔣介石は攻撃の日時を指定しなかった。この曖昧さのために、《2日でこの城を占拠できないならば、そ

れを中止しなければならない。さもないと兵士達は風邪を引いてしまうであろう》という噂がさらに一層広まった。

強襲のために第一軍の第2師団第4連隊と第3師団が割当てられた。

北門地区を強襲するために、第4連隊が10月10日12時迄に市の北西部に面して配備された。その右方面、市の西、南、南東に第3師団が18時迄に陣取ることになっており、そして城壁の最も弱い部分を強襲することがそれに委されていた。

10月10日、第4連隊の本部は偵察を行った。本部の構成は劉大佐を長とし、彼の顧問 Шевалдин、前任の砲術顧問 Бесчаснов、工兵 Яковлев、砲兵 Гилев——彼は珠江を強行渡河したことで我々がよく知っている2門の砲兵中隊の指揮官——そして2門の山砲中隊の中国人指揮官であった。この偵察に関して Яковлев は報告書の中で次のように述べている。

《偵察隊は市をとり巻いている仏塔の中の北の塔のすぐそばで劉大佐に会い、市の方に向かった。惠州は丘の多い土地であるが、その周囲には直接川沿いに低地が延びており、そこには放置された村々、荒廃した果樹園、竹やぶがあった。問題は住民達が絶えざる軍事行動の被害を少なからず受け、この土地を見捨てたことであった。家々は、市に近い所だけは射撃を確保するために完全に破壊されていたが、少し離れた所には、それらの廃墟が残っていた。

我々は惠州に最も近い建物の所まで辿り着き、観察を始めた。城壁の北西部だけでなくその胸壁の隙間に個々の兵士の姿を、また無線通信所地区にある独特の中国風な園亭に何組かの将校達の姿をはっきり見ることができた。

我々が偵察を行っているうちに、一つの執拗かつ嫌な噂がくずれてほっとした。——当地の中国人が次のことを断言した。城壁から約100mの所で狭い石造りの橋がかかった、水を湛えた水路がすでに述べた帯状の土地——そこを通れば攻撃が可能となる土地——を横切っているということであった。《恐ろしい》水路は小さな連絡支流であることがわかった。はからずも更にもう一つの喜ばしい状況が明らかになった。水路の南側で湖を横切って、巾2~3mの3本の狭い堤が通じていた。その両斜面は急で、敷石で舗装されていた。長さは600m足らずであった。斯くするうちに、我々は昼間偶然にも、その一番北の堤の上に伝統的な中国の籠を2つつけた天秤棒を担いだ苦力を見掛けた。こ

の苦力は平然と市の方へ向かった。しかしどの提も木製の柵で遮られているのではないか。一体、彼はどうするつもりなのだろうか。ところが苦力はその障害物に近づくと、ためらうことなく水の中に入った。湖の深さは人間の背丈を越えなかった。そして、確かに苦労はしたがまた堤によじ上った。

この事から、少なくとも北側の堤を通っても攻撃が可能であった。第4連隊劉連隊長は砲術顧問 Гилев に機関銃の配備場所を教え、不安そうに尋ねた。《ところで、砲兵隊は櫓と北門の上部を破壊することができるだろうか。もし我々が機関銃を圧倒することができなかったならば、我々は何も役に立たないことになる》。《勿論可能だ》——Гилев は自信を持って答えた。劉は手放して喜んだ：《そうだ、全てがうまくいった時には市は我々のものになるだろう！》彼は気持を著しく急変させた。

我々はまた飛鵲嶺に至るまで、第3師団全部隊の配備を眺め、1日で約35kmを歩き、ひどく疲れた。途中で我々は一連の小銃の急射撃を受けたけれども、偵察は無事に行われた。市へ接近する方法を研究する過程で、目前に迫った強襲のための解答が生まれた。それはこうした条件の中では十分に創造的なものであった。そしてその基礎となったのは当時の中国にとっては全く新しい、火砲の応用であった》。

少し後で惠州付近の砲兵隊顧問 Бесчаснов が作戦の総括に関する彼の報告書の中で次のように述べているが、それは正しかった：《一般的な意見も、我々砲兵の意見も、顧問 Черепанов の意見も次のようであった——火砲を分散せず、攻撃力として集中し、第4連隊が攻撃する狭い地区を集中的に砲撃する》。

市の北西部は高地になっていて、その内部の起伏を一望に見おろしているの、まさにこの地区は惠州占拠のための重要地点であった。それに加えて、当時言われていたように、特別任務砲兵中隊に配備された《有坂》砲2門が攻撃軍の火砲の中で唯一の本格的な戦力であった。それ以外は山砲で、信頼できる弾丸が充分に無く、また市の城壁を破壊する能力はなかった。

北西地区はこの《有坂砲》を配備することのできる唯一の場所であった。しかし、全く道が無いために、兵士達は先ず大変苦労して舳板に砲を乗せ、浅い所を通して運び、それから砂地を数km自分達で引きずっていくしかなかった。だが彼等は自分達の任務をやり遂げた。

砲兵隊を攻撃部隊に編成することに関しては、少な

からぬ且つ内部的な困難があった。10月11日偵察の際、砲兵関係のメンバーは第4連隊劉隊長及び顧問 Шевалдин と協議し、火砲の配備に関する事柄を決定した。しかし、司令部を訪ずれた後、市の方へ戻ってみると、中国側の将校達が10月12日の午後になっても計画遂行のために何もやっていないことを突きとめ、愕然とした。《有坂砲》は相変わらず舳板の上に置かれたままであり、山砲の方は渡し場に有った。とりわけ驚いたことには、以前我々の同志が居た場所に蒋介石が到着し、第4連隊支援として予定されていた砲の一部を取って、大酒飲みで無智な砲兵隊長の蔡大佐と一緒にそれらを第3師団地区へ送っていたことが判明した。残された戦力の中から砲兵突撃隊を急遽編成せざるを得なかった。Геннадий Гилев が指揮する《有坂砲》中隊は実際には、仏塔の近くの川の傍にある高台に陣どった。その3階に砲兵中隊と電話で連絡をとっていた Бесчастнов の監視所があった。

強襲しようとしている主要地区の城壁は殆んど所で12~14mの高さがあり、身長と同じ位の高さで巾1mの胸壁があることが明らかになった。我々がこの市を占拠した後で確認したように、城壁の下部は8~10mの厚さがあった。

ここは市の中で最も難攻不落の部分であったが、その代りそこまでの道は乾いており、一番近い村の廢墟は軍隊をひそかに近付けることを可能にし、水路によって軍隊は最後の突撃の前に銃火を避けることができた。

強襲する予定の帯状の土地は北及び西門から集中砲撃された。山砲2門を備えた第4連隊第3大隊は銃火と攻撃の威嚇によって敵の注意を強襲軍主力からそらすために、西門に通ずる堤の両側にある陣地を占拠するよう命令された。

博羅で私は Шевалдин から次のようなメモを受取った。それは市の西部と東部の連絡を断つために、両者を結ぶ小船の渡し場の向こうにある東江の北岸に機関銃2丁を備えた1個中隊を配備するように、という要請であった。第1師団長何応欽——私は従来通り彼の顧問であった——の命令によって、指定された位置に大砲4門を備えた第2連隊1個大隊が配備された。

午後、第4連隊の陣地に梯子を持った工兵小隊と砲兵将校の一団が到着した。連隊長は彼等の所属をどうするかに関して何も指示を受けとっていなかったの

に行動した。第3師団の部隊は24時間遅れて自分達の割り当てられた陣地に接近した。

10月11日17時、第4連隊の政治委員は政治工作員全員を会議に召集した。政治委員達は強襲の際、兵士達の模範とならねばならなかった。Шевалдин は彼等に武器が無いことを指摘した。ライフルが彼等に支給された。

10月11日から12日にかけては一晩中特に集中的な交戦は無かった。

10月12日11時、第4連隊長は強襲に関する戦闘命令を受けた。命令の内容は以下の通りであった。先ず200人の志願兵から成る突撃隊を編成しなければならない；攻撃軍に梯子を支給すること；10月13日1時より準備射撃を開始すること。強襲は14時に予定されていた。

正午、蒋介石と顧問 В.П. Рогачев が連隊に到着した。強襲の場所として選ばれた地区を監視所から観察し、命令を確認し、砲兵隊に若干の指示を与え、連隊長の決議を是認し、それから第3師団の陣地に赴いた。

連隊の中で政治集会が持たれた。そこで司令部は自発的に突撃隊に加わるよう兵士達に呼びかけた。惠州を占拠した後志願兵には一人30元与える約束がなされた。

この指令は作戦が行われる毎に報酬が与えられるという軍閥軍の伝統に従ったものであった。だが、今回はその必要は無かった。もし本当に突撃隊を創るとするならば、新しい戦闘単位を編成しそれを受取ることができするためには、少なくとも強襲の約2週間前にやらなければならない。兵士や将校が色々な部隊から集められた。その結果、それらの部隊の人員は不足した；一方、彼等はお互いに面識が無く、部隊は全くの寄せ集めであった。

劉大佐は志願兵の募集を10月12日正午頃始め、約260名の兵士を集めた。彼は整列を命じた後、国民革命軍による惠州占領の意義及び第4連隊全体にとってその成功がいかに重要であるかについて、熱烈かつ上手な長い演説を行った。明らかに、兵士達は彼の言うことを理解し、それを信じた。因みに彼等の中の何人かは雲南出身の兵士で、以前惠州で軍務についたことがあり、市の見取り図をくわしく思い出すことができた。

部隊は18時に集合し、6人づつのグループに分かれ、それぞれに梯子が支給され、Шевалдин と Яковлев の指導の下に壊れた建物の10~20mの高さの壁で訓練が始まった。Яковлев は梯子を運んで来て、壁に近づけ

て立て掛け、それを支えてから登り、城壁に向かって手投げ弾を投げる方法を示した。5～6名の兵士から成る1グループが駆け足で20m離れた所から梯子を運び、2～3名が上によじ登った。これら全ての事を行うのに70秒はかからなかった。

第一次東征に成功したこと、広州商団事件を鎮圧したことは兵士達の心の中に、必ず市を占拠することができるという確信を吹き込んだ。全軍の戦闘意欲が高まった。

ついに20時、より具体的な命令が出された。連隊長は將校達を集め、強襲作戦のディテイル全般に渡ってもう一度彼等と協議した。24時頃歩兵部隊と砲兵隊が出発点に到着した。

10月13日、強襲の始まる前、東方部隊は博羅——樟木頭駅の線に沿って惠州の北東側に集結した。Бесчастновは次のように述べている。9時45分きっかり、泗州塔のそばの陣地から砲撃が開始された。砲兵隊はすばらしい腕前を示し、それはまるで演習場の模範射撃のようであった。早くも7番目の榴弾が目標——第二西門——に命中した。その後、北門の櫓の胸壁や北及び北西の城壁の胸壁の一部は吹き飛ばされ、また一部は半壊の状態になった。南西の胸壁の一部も破壊されたが、それは山砲砲兵隊が砲火を浴びせたものであった。敵は山砲で《有坂砲》陣地への砲撃を試みたが失敗し、3発射ただけで沈黙を余儀なくされた。何故なら、我が砲兵隊は推定される敵の陣地の方へ砲火を転じたからである。無線通信所と衛戍司令官本部に命中したのが確認され、何か所かに火災が発生した。私は電話でГилевに砲撃は見事に行われたと伝えた。他の砲兵中隊も砲火を開いた。その状況は実に印象的であった。

中国人達はこのような集中砲火を今まで見たことがなかったので、砲弾が炸裂する度にとてもフランクに喜び、的確に命中すると必ず《わあっ》という一斉の大きな叫び声をあげた。《有坂砲》中隊は攻撃が予定されている直前まで市を滅多打ちにし、30分間だけ射撃を中止した。というのは砲身が赤熱してしまったからである。この日発射したのは約500発であった。

13時私と何応欽は東江を渡って各砲兵陣地に立寄った。黄埔軍官学校生徒から成る砲手隊は整然とその役割を果たした。Гилевはどういう訳か軍服ではなく普通の麻の服を着ていた。上着はそのまま弾薬箱の上にあった。いつものワイシャツを着て、時々汗を拭いながら、彼自ら2門の砲を目標に向け、《発射！》の号

令をかけた。命令を出す度に自分の丸い麦わら帽子を力を入れて振った。

多分、我々は城壁の上にいる敵軍を駆逐することに成功したのであろう。強襲の時は迫りつつあった。我々の陣地と惠州市の上空を飛行機が1機飛び過ぎて行った。進攻部隊の攻撃作戦を進展させるために、第1大隊が破壊された村へ入って来た。13時45分、進攻部隊を傷つけないように砲兵は確実に計画通り、砲火を市の内部へ向け変えた。今や、胸壁のどの凹部からも機関銃の猛烈な敵の射撃が見られた。

しかし何としたことか。何故、指定された時刻に突撃隊は城壁に突撃しなかったのか。我々は愕然とした。気がついてみると、突撃隊は射撃中に水路のそばに集結することができず、予定された70～80mの所からではなく200～300m離れた所から、今や最後の突撃を行っている所だった。

15分間の空白が生じた。敵は元気を取り戻し、再び胸壁の無事に残った凸壁と土囊の後の防禦陣地に就いた。斯くて、彼等は機関銃の火力を受けることなく、殆んど勝手放題に我々の勇士を射殺し始めた。不幸なことに、東征の前に將校と政治工作員全員にカーキ色の軍服が支給され、一方兵士達は全員暗青色の軍服であった。それ故、楊坤如の狙撃兵達は誰よりも先ず指揮官達を抹殺することができた。

突撃隊の隊長は自分の部下を集結する点で大きな失敗をしたにしても、彼自身は勇敢に振舞った：彼は水路の石橋の上に立ち、全力を上げて指揮し、進攻を極力組織的に行おうと努めた。太陽の下、敵が彼に対し猛烈に射撃してくるのを少しも恐れず、敵からわずか70～80mの所にあった。間もなく彼は英雄的な死を遂げた。

生き残った突撃隊員は水路の向こう側に走って行き広い場所に出た。ここは本来突撃を開始する場所であった。彼等は壕を掘る道具も梯子も持っていなかった。それらは全て死傷者の傍らに置き去りにされていた。砲兵隊員は自軍に命中することを恐れて砲撃を再開しなかった。

突撃隊を緊急に組織したという無思慮のために悲劇的な結果が生じた：隊員達はお互いを知らず混乱が起った。生き残った隊員は水路の所にひしめきあった。

——我々も加わらなければならない——と私は何応欽に言った。

——ここのチーフは第4連隊の隊長です——と將軍は同意しなかった。——我々に与えられている命令は

博羅を守ることです。

——だが別に誰も我々が進攻部隊を援助することを禁止してはいないでしょう。

私は第4連隊の隊長の監視所へ行く前に、Гилевに北門楼に向かって砲火を開くよう要請した。というのは、そこに敵兵が堅牢な機関銃の掩蔽部を作っていることを我々はすでに突き止めていたからである。

連隊長はその監視所には姿が見えず、彼はもっと先へ行っていた。我々は村の東端に向かって移動した。

第2大隊の隊長が突撃隊の指揮を引き受けた。しかし、彼もまた2つの梯子を運んでいる戦士達のグループに加わってすぐに城壁の真下で犠牲になった。突撃隊は人員の半分を失った。

続いてすぐに攻撃に投入された第1大隊は大隊長及び中隊長全員を失った。戦士の一部はまた水路の中に、残りは廃墟の中に隠れた。

狭い堤に沿って他の城門を攻撃していた第3大隊は成功しなかった。彼等は多数の死傷者を残し塔の方へ退却した。

予備軍には第2大隊だけが残っていた。

劉連隊長は指揮権を副官に渡し、本部の一小隊を率いて水路に向かった。彼は事態を救うことを願って、ただちに生き残っている兵士達を率いて進攻する決断を下した。しかしこの決断は誤っていた。劉は兵士達の戦意喪失を計らなかったしまた、適時に予備軍を投入しなかった。

劉連隊長は騎兵出身であった。騎兵は以前は主要な突撃兵力であった。軍隊の中では、騎兵は先ず突進し、その後で考えると言われている。彼は兵を班に分けることをせず、班長も任命せず、また城壁に梯子を運ぶこともやらず、サックからピストルを引き抜き大声で命令を発した。

——進め！後に続け！ワア！

彼の後に続いたラッパ兵は何度も突撃合図のラッパを吹いた。

本部の一小隊と突撃隊の兵の一部が彼に続いて突撃した。しかしすぐに強力な火力を浴び、ただ犠牲者の数を増やただけであった。劉は城壁の根元の所で致命的な傷を受けて倒れた。彼は火力の外へ担ぎ出された。その他の兵士達はまたもや水路に隠れた。

私と何応欽が村の東側にやって来た時丁度、まさに瀕死の状態にある劉連隊長が運ばれているところであった。我々には戦場全体の状況が一目瞭然であった。

私は将軍に勧めた。《指揮権をとり且つ、この事態を

蒋介石に報告しては》しかし、何応欽は命令のないことを盾にとって再びそれを拒否した。

連隊副官と顧問 Шевалдин は予備の第2大隊を進攻に投入することを決めた。

この部隊は16時30分、砲兵隊の掩護射撃の下に行動を開始し、殆んど損害を被ることなく水路に集結した。城壁に向けての砲兵隊の射撃は敵軍の火力を圧倒した。号笛が鳴り始めた。これは突撃の合図であった。《ワア》という大きな叫び声が聞こえたけれども、また突撃は成功しなかった。水路の所には第2大隊が入る余地は無かった。第2大隊の兵士達は突撃隊及び第1大隊の混乱した部隊の中に入りこみ、分散した。再度攻撃をかける可能性は有ったけれども、それを生かすことができなかった。つまり、第1大隊を水路に集まっている兵士達の間を通り抜け、浅瀬を通して攻撃に向かわせることであった。

斯くて、突撃を行ったのはわずか数人の将校と兵士であり、彼等は城壁の真下まで駆け寄ったが、他の兵員はその後に続かなかった。残された兵士達は指揮官も無く、水路に沿って右往左往しただけで前進はしなかった。

この厳しい状況の時、私は遂に何応欽を説得して指揮権を掌握し、この事を蒋介石に報告させることに成功した。ただちに司令官の同意書と私に何応欽の顧問として留まるように指令した Рогачев の文書を我々は受領した。

夜の暗闇が迫りつつあった。私と何応欽は部隊に休息を与え、生き残った将校や下士官達を再配置することに決めた。そして西門の傍にある第3大隊の代りに第3師団の部隊を任務に就かせるよう蒋介石に要請することに決めた。我々はこの大隊を突撃隊に加え、もう一度突撃させようと思っていた。

暗闇の中で死傷者を運び出すことができた。敵の守備隊は竹を松明にし、針金にぶら下げて城壁を照らしていた。

21時にはもう砲兵隊は城壁に向かって砲撃することができなくなった。というのは自軍を撃たないためであった。戦士達は又もや十字砲火の下に倒れた。城壁から我が軍に向かって石や石灰石や木の塊が雨のように降り注いだ。無かったのは中世に於ける攻城軍に注がれた熱湯や火のついた樹脂ぐらいのものであった。突撃は再び阻止された。兵士達は疲労困憊の極に達し、休息と食事が必要であった。我々は第3大隊で連隊を増強し、10月14日朝4時、再び突撃を行った。

しかし又もや失敗した。夜が明けようとしていた。部隊は相変わらず水路にあった。

1日目の昼と夜の結果は兵士達全員の士気を阻喪させることになった。惠州城は難攻不落のように見えた。

大本営全体が意気消沈し、惠州城に係わる全作戦を中止することさえも本気で提起された。

蒋介石の参謀長胡謙將軍は悪びれることなく出席者に対してはっきり言った。《歴史上、未だかつて卵が石を砕いたことはない。》蒋介石も動揺した。

しかし今や、我が軍が精神的敗北を喫しないために、戦いを勝利の結末へ導くことが要求されていた。

当時蒋介石の顧問であった Porachev は蔣に対して彼が自ら現場に赴き、すでに形成された状況を了解するまでは、進攻を停止するという命令を下すのをしばらく待つよう要請した。このような状況下ではあったが、我々顧問が提案した第2日目の進攻に関する事前の決定は依然として有効であった。

我々は兵士達が革命的意識を持っていると堅く信じていた。弾薬は残り少なくなった。

失敗した場合には攻城作戦を放棄するか、或いは5日間程攻撃を遅らせてその間に広州から弾薬を運び込むか、そのいずれかを採用せざるを得ないであろう。この間に敵軍は市の守備隊に増援部隊を送り込み、主導権を自分の手に握る可能性があった。

我々の要請に応じて第3師団第8連隊の2個大隊が我々の所に派遣された。この師団はこれまで行われた数回の突撃に参加したことがなかった。

私はやっとの事で Гилев を説得し、北門及び西門の門楼を砲撃し続けると同時に、突撃隊が城壁のほぼ真下に行くまで城壁に向かって砲撃を続けさせた。Гилев はなかなか承知しなかった。というのは砲弾が炸裂して自軍に損害を与えることを恐れたからであった。

《そういう可能性は少ない；だって君は直射をやるんだし、しかもそれは城壁の根元ではなく胸壁に向かってやるんだらう。君の掩護が無ければ敵は又もや勝手気ままに我が軍を射殺するだらう。》私は Гилев を説得した。《北門の掩蔽部を制圧する必要がある。》Гилев は遂に同意した。

私はその時 1916 年のことを思い出した。クリスマス・イブにシベリア及びラトビア狙撃部隊はリガの橋頭堡にある独軍陣地を攻撃した。それは不意をつくために準備砲撃なしで行われた。第56シベリア狙撃連隊第2大隊が進入できるように、敵軍の鉄条網に4個所の進入口をつくらねばならなかった。擲弾兵と中隊規

模の偵察兵の混成部隊が私の指揮の下にこの任務を果たした。右側の2個所の進入口は鉋を用いて開けられ、左側の2個所は導線付きの爆薬を爆破させて開いた。我々は前以て貫通の場所を選定していた。私は最も優秀で勇気ある兵士及び下士官をリーダーに任命した。斯くて、リーダーを先頭に一列になり、3人組がお互いに20~30歩の間隔を置いて進むことになっていた。これは死傷者が出た場合交替するためであった。

私は惠州進攻に際して同じ方法を用いることを提案した。——各小グループが鎖状に連なって進攻する方法。我々は北門と西門の間に梯子を設置する地点を選定した。先頭には中隊の政治委員——共産黨員——と梯子を持った3人組が進んだ。他の2つの3人組は各進攻グループの後に続き、死傷者が出た場合いつでも交替できる状態にあった。

第4連隊の諸部隊はひどい損害を蒙ったにも拘らず、極めて良好な秩序を保っていた。それらは予備の中隊の補充を得て左へ移動し、第8連隊の1個大隊のために場所を提供した。その大隊は砲兵隊の砲火の掩護を受け、殆んど無傷の状態で水路の所に場所を占めていた。第8連隊のもう一つの大隊は予備軍として残され、その兵力の一部を使って西門の敵軍を牽制した。蒋介石との連絡が跡切れた。そこで私と何応欽は独自に突撃の時間を10月14日14時と決めた。というのはこの時間には太陽が西側に移り、敵軍の目を眩しくさせることを考慮に入れたためであった。第4連隊の12丁の機関銃全てが戦闘準備を完了していた。

丁度この時、В.П. Рогачев が到着した。彼は蒋介石が絶望に陥っていること、そして彼が突撃を延期してはどうかもう一度考慮するよう願っていることを我々に知らせた。

我々は断固として反対した。Яковлев は言った：——疑いもなく、我々はこの中国のイズマイル（第二次ロシア・トルコの決戦場）を攻略できる。ここには Суворов（その時のロシアの將軍）はいなくともコミニストがいる。

遂に一切の準備が完了した。12時、準備射撃の一発目の射撃音が響いた。城壁からの報復の砲火はすぐに静まった。私と何応欽と Яковлев は水路から100~150m離れた村の北辺にある、壊れた建物の窓から戦場を観察した。我々の右側にあるドアの近くに3人が立っていた。その中に若くて均斉のとれた第8連隊の隊長がいた。彼が着用している軍服と木製のサックに入れて脇に吊したモーゼル拳銃は極めて印象的であった。

第4連隊の指揮官の任務を果たしている将校と顧問 Шевалдин が水路の所にいた。私はどういう訳か、この第8連隊の優雅な身なりをした指揮官が突撃に参加するかどうか疑いを抱いた。私が見ていると、突撃の丁度5分前彼は左手にモーゼル拳銃を持ち掩蔽部から出て、勇ましく足取りで水路の方へ向かった。

丁度14時にリーダー達が水路を飛び出した：右側の戦士は青い国民党の旗を持ち、左側の戦士は赤い軍旗を持っていた。彼等の後に梯子を持った兵士が続き、その後に予備の3人組が動き出した。先頭グループが一行になって進んで行った。敵の猛烈な銃火で多くの戦士が死傷した。彼等が倒れると、彼等の後に続いている同志達がすぐに梯子を拾い上げ前進した。

遂に最初の8～10人の兵士が城壁の所まで駆け寄ったけれども、梯子を立て掛けることができなかった。敵の砲火が彼等を打ち殺した。中隊の政治委員だけが無傷で、城壁の真下で彼の手に旗をはためかせていた。兵士達は列を成して短い躍進を行った。城壁の傍にすでに15人が到着した。

右側で第8連隊の隊長が砲火の下で自分の部隊を指揮していた。政治委員であるのか副官なのかよくわからないが、彼の傍に立っていた一人が倒れた。

旗は強い風を受けてはためき、あたかも突撃部隊を自分の方へ招き寄せるかのようであった。この時までには我が砲兵隊は門楼上の火点を制圧した。そこで敵の十字砲火は止み、今や撃つて来るのはただ城壁からだけであった。しかも城壁の前に《死角》ができ、我が戦士達はそこに隠れることができた。突然大砲が沈黙した。

——何事だ、Геннадий——と私は電話で怒鳴った。

——自軍を撃つ恐れがある。それに弾薬も残り少なくなった。

——今こそ兵士達が城壁の上に登るのを掩護しなければならぬ時だ。

新たな砲声が轟いた。砲弾の破片で自軍を傷つけないう様に《有坂》隊は榴弾ではなく、榴散弾を砲撃に用いた。

突撃隊は城壁下の《死角》を利用した。その場所へ二人の旗手もやっとの思いで到達した。敵軍はいらいらし始めた。城壁の上から又もや石や生石灰や木材を撒き散らし、燃えている油を注いだ。それによって城壁の根元付近の草が燃え始めた。火薬の詰まった手製の手投弾や上から投げ落とされる手榴弾の爆発音が響いた。しかし、これらは全て役に立たなかった。兵士達

は機関銃の激しい銃火の掩護の下に、最初の竹製の梯子を立て掛けた。罅の広い麦わら帽子を被った一人の狙撃兵がその梯子を粘り強くよじ登って行った。すると左側に第2の梯子が立てられた。コミニストの戦士がそれに登った。緊張は極度に高まった。この戦士は胸壁の下部に到達し、城壁の上を目掛けて手榴弾を投げた。ほんの一瞬間、全てが凍りついたようだった。すると耳を聳するような爆発音が聞こえた。その一秒後に……万歳!!その戦士は城壁の上に立った。

更にその横に梯子がいくつか立てられ、兵士や将校達は並みはずれた巧みさでそれを登って行った。16時10分城頭に旗が翻った。

私と何応欽は予備の1個大隊に水路の方へ移動するよう命じた後、城壁の方へ向かった。どうした訳か私は戦闘の最中、Евгений Андреевич Яковлев が自分の傍からいなくなっていることに気がつかなかった。この時私は彼の姿を認めた。彼は突撃部隊の第一波と共に行動していた。彼は1分後にはすでに城壁の上に立ち、それから胸壁の陰に消えた。私は彼の言葉を思い出した：《この戦いに参加したくてむずむずする。だがもし私が撃たれたら妻や娘は何と言うだろう》私は思わず微笑した：このベテランの兵士は自制することができなかった。

城壁の上では手榴弾が絶えず破裂し、小銃や機関銃の射撃音が響いた。兵士達は勝利の喜びに包まれ、歓呼の声をあげた。

我々はやっとのことで城壁の上に秩序を取り戻し、作戦の進展に必要とされる場所へ部隊を移動させることができた。Яковлев は城壁に沿って他の者よりもずっと前の方へ走って行き、第3師団の兵士達に出会った。彼は中国語を知らなかったので苦境に陥った。彼は捕えられた。彼は心の中で思った。《ああ、これで終りだ》。すると突然我が英雄は空に舞い上った。兵士達は顧問に対する尊敬の印として喜んで彼を胴上げした。

城壁の上から我々は思いがけない光景を目にした：第2連隊の兵士達は敵軍が東惠州に渡河するのを砲火で妨げるという自己の任務を忘れ、彼等自ら小舟に乗って東江を渡り市へ向かっていた。小舟に乗れない兵士達は泳いで渡っていた。

その結果、楊坤如が率いる守備隊の一部の500～600名が東惠州を通り、顧問達に知らされていなかった《黄金の橋》を渡って郊外に逃げ出すことができた。

蔣介石は事実上、惠州進攻作戦を指揮しなかった。最初に失敗してから彼は作戦が成功することを全く信じ

ていなかった。彼は自分の指揮所の位置を主要な戦区ではない二次的战区——飛鶴嶺に置くことさえした。これは伝統に従ったもので、以前に惠州を攻撃した連中は通常ここに陣を取った。

棉湖作戦や広州商団事件の場合と同様にこの戦いに於いても、主要な役割を果たしたのは国民革命軍と民衆の統一戦線であった。住民達が勝利者を迎える際に用いた紙の旗に《ロシアの同志達》に敬意を表わす挨拶の言葉もあったのは興味深いことである。

惠州城は基本的にコミュニスト達によって占拠されたもので、彼等の意志は難攻不落の城壁よりもっと強固であることが示された。

勝利を喜ぶ一方で、倒れた同志達を葬りながら暗い気持になった。追悼会に於いて私も発言が許された。1926年3月付の手書き雑誌《広東》No.7の中に私の弔文が載せられている。それを殆んど省略せずここに引用しよう。

《戦闘の時、私には大切なものは何も無かった。もし勝利のために必要とするなら、私はその全てを戦場に投入しよう。だが戦いの後に私を捉えたのは倒れた同志達に対する、果しない悲しみであった。今、私は一人になって何度でも泣きたい。

彼は諸君の知り合いであり、また共に戦った親友でもある。そして彼の生きていた時の事が数ページの思い出となって諸君の記憶の中に残っているに違いない。その倒れた親友の姿が記憶の中にくっきり現われると、特に鋭い痛みを感じるものである。

そのような親友の劉連隊長を私は1925年10月13日、惠州進攻作戦で失った。

私が彼と知り合いになったのは黄埔島から広州へ行く汽船の上でのことであった。中国人は一般に、初対面の時は遠慮する傾向がある。ところが彼は無造作に、そして気取らずに私の方へ近付いて来て話し始め、10分程経つと我々は親友になった。

我々の会話は別にそう洗練されたものではなかった。彼は英語の単語のいくつかとロシア語の《хорошо》(良い)《нехорошо》(悪い)を知っているだけであり、私も少しばかりの中国語を話すだけであった。しかし、共通したもので繋っている人間同志にはそれ程多くの言葉は要らない。彼等は無言でもお互いを理解し合う。

後に我々是一緒に黄埔軍校の生徒や新軍の兵士達を教育し、また宴会や戦場で何度も出会うようになった。彼は教え方が上手であり、話しをすると楽しく、友情は厚く、立派に戦った。

彼は騎兵でこの兵種の典型的な人物であり、それにふさわしい全ての長所を備えていた：活動的で楽天的であり、戦闘の際、電撃的に決定を下し、疲風の如く自分の部隊を突撃に向かわせた。

私はしばしば彼に見惚れ、将来彼はきっと光栄ある偉大な司令官になるに違いないと思った。国民革命軍が広東省の外に出た時、私は彼にとっては不慣れた歩兵から軽快な騎兵に戻ることを願った。だが人間の運命を予見することは難しい。

惠州城の城壁下で行われていた彼の連隊の攻撃が阻止された時、彼は連隊内の優秀な小隊の先頭に立って突撃した。それは戦意喪失した歩兵の士気を再び高揚させるためであった。彼が突撃に率いた40名の戦士のうち18名が生き残った。その中には劉大佐はいなかった。彼は致命傷を負い、深い悲しみで泣いている兵士達によって戦場から運び出され、意識を回復することなく死亡した。

その翌日、将校達の殆んどを失った彼の連隊が自分の同志達の死体に沿って突撃し、惠州の歴史上初めて城壁を占拠した。そしてその勝利を祝っている。英雄的な死を遂げた友人であり且つ指揮官である劉大佐の棺を我々は悲しい気持で見つめている。

党は劉同志という革命の戦闘的参加者——戦士を失った。一方兵士達は指揮官を失ったが、それと同時に彼によって勝利を得た。

勇者よ安らかに眠り給え！

君の思い出は長い間我々の心の中に残っているであろう。一方君の戦功は中国の革命史の数ページの中に記録されるであろう。それは中国の青年達の手本として役立つであろう。》

惠州城進攻の際に倒れた戦士達を追憶するために催された追悼集会の席上、このように私は自分の追悼の言葉を結んだ。

広東の解放

惠州城に対する激戦の最中に再び緊迫した状況が生じた。第4軍第12師団が鄧本殷側に寝返った。第10師団の師団長陳銘枢將軍は進攻して来る敵軍を阻止するに足る十分な兵力が自分の所には無いと報告してきた。北方軍閥が派遣した砲艦数隻が広州へ向かう航路上で、虎門の政府側艦船に脅威を与えていた。

陳炯明の手先どもが広州市内でパニックを引き起こすような噂を撒き散らし、計画的に放火した。破壊工

作者達は黄埔軍校の第2師団兵舎と中央発電所周囲の街区を燃やしてしまった。発電所はやっとのことで火を免れた。

東部戦線でも状況は複雑化した。陳炯明の主力軍は予想された梅県——河婆の線に沿った地区ではなく、そのずっと南に集結した。陳炯明は軍を淡水に向けて進めた。その任務は広州——九竜鉄道に出て鄧本殷軍と協力し、北方軍閥の艦船と香港の帝国主義者の支持を得て広州を攻撃することであった。

それ故、国民革命軍の最初の攻撃計画は変更された。東部戦線の主力部隊はもっと南へ移動した。

今や、南方グループは何応欽（顧問 А.И. Черепанов）指揮下にあり、黄埔軍校第1師団、呉鉄城（顧問 Е.В. Чесленко）の警衛軍第1独立師団から成っている。それは海岸地域に沿って海豊へ、更に河婆——普寧——汕頭方面へ進攻することになった。

中央グループは第4軍から成り、第1軍第3師団がそれを補強し、李濟深（顧問 В.Н. Панюков）の指揮の下に紫金——潮州方面へ進攻することになった。

北方グループは程潜（顧問 Н.И. Кончиц）の指揮の下、河源——五華——興寧——梅県に進出し、敵軍が江西、福建両省に退却できないようにさせることがその任務であった。

中央及び北方グループの中間に Fan Te Pei 将軍指揮下三水グループ（顧問 С. Шнейдер）が進出した。彼等は信頼できないものと見做されており、その部隊は武装解除される予定であった。

第1師団が最強で、それは我々のところで《重装備親衛隊》と呼ばれていた。洪兆麟軍との遭遇戦では難無くそれを撃破し、さらに追撃して海豊、河口、河婆を奪取した。住民達は到所で勝利者を熱烈に歓迎した。群衆は通常、広州軍を歓迎するために村はずれに集まった。爆竹が小銃の射撃音のようにパチパチ鳴った。何応欽将軍は自分に敬意を払われることが大好きで、いつも一番先きに村へ入ろうとした。彼は時には居住地区へ乗り込む前に自分のブチのポニーに乗ることもあり、道路状態が良ければ速歩又はギャロップで歓迎者達の所へ馳着けた。

我々顧問達は埃まみれで日焼けしており、皆と同じような服装をしていたけれども、すぐに我々は見分けられた。特に子供達は早かった。彼等は我々の後を追いかけて、大声で《洋鬼子》と叫んだ。この言葉は《外国の悪魔》という意味を持っている。当時中国の田舎では、全てのヨーロッパ人はそのような余り愉快でな

い名称で呼ばれていた。そのような《挨拶》に対して年長者達は子供達をピシャリと打ち、誤りを正した：《外国の悪魔ではなくロシアの顧問、我々の先生だ。》

河婆を占拠した後、追撃を続行して汕頭へ急行することが必要であるように思われた。しかし、あまり急ぎすぎはいけないと私は直観的に感じた。呉鉄城の独立第1師団は我々から2日行程の所にあった。我々はその師団が中央グループを増強するために行くよう命令されていたことを、その時まで知らなかった。私々は東方戦線の司令部とも又隣接部隊とも連絡を保つことができず、遠くまで前進して気がついてみると、孤立したようであった。それまで退却していた洪兆麟の軍隊が突然戻って来た。私と私の副官 Палло は状況を検討してから、河婆に留まって周囲の形勢を察知することが必要だと考えた。何応欽もこれには反対しなかった。後にわかったように私は正しかった。

夜、当地の一人の教師が司令部にやって来て、林虎軍によって中央グループが重大な敗北を喫したらしい、という噂が住民の間に流れていることを知らせた。我々は直ちに1個連隊を河婆の西北方向に派遣した。その任務は敵が横江方面から又安流からの道路を利用して接近するのを阻止することであった。

次の日の明け方、連隊長が安流方面から進攻して来る敵との戦いが起ったことを報告してきた。我々は洪兆麟の軍が戻って来る道筋に1個大隊を残し、師団の主力を以て林虎軍に襲いかかり、それを撃破し、精神的にそれを追撃し始めた。

河婆からおよそ1日行程の所に我々は宿泊し、追撃のためには小部隊を派遣しただけであった。

何応欽将軍は戦いの後、退却にともなって離れて行った敵のグループを捕捉するために、作戦の主要な戦区の周辺部に小部隊を派遣することを命じた。当時の状況下でこのことは無駄な試みであったので、私はそれに反対した。しかし何応欽は自分の《Fulu(俘虜)》——捕虜——を求めて勝手に行動した。何応欽はどこかの軍隊が今も東北方面に陣を構えていることを地方住民から聞き知って、それを待ち伏せるために小規模の偵察隊を出す代りに1個大隊全員を派遣した。明け方村から一列に並んで出て来た縦隊を見て、まっしぐらに攻撃し《捕虜にした》。それは我々の第11師団の主力部隊でこの時何人かの負傷者を出し、その中には指揮官の兄弟もいた。

第4軍第1師団の顧問 С.В. Шалфеев が中央グループの敗北を我々に知らせてきた。広東西南地区の状況

も悪化し、そのため中央グループの指揮官であり第4軍の軍長である李濟深は決戦の前夜に戦線を退却する許可を、蔣介石に求めざるを得なかった。彼は自分の《領地》にいかにして戻るかのみを考えて、軍を指揮することには余り注意を払わなかった。その結果、敵軍はランタン地区で彼の独立旅団をひどく叩き、何の損害も受けず転進した。

そのグループの右側を進撃していた黄埔第3師団は竜村まで来て、敵が塘湖へ退却したことを知りその追撃を始めた。師団は塘湖地区で林虎の主力と衝突した；他の部隊の支援も無く敗北し、算を乱して退却した。過去にみられた第7旅団の《伝統》が復活した。パニックは道路を前進して来た他の中央グループの部隊にも広がり、さらに蔣介石自身をチーフとする司令部の要員にまで広がった。確かにこの師団は《運》がよかった：蔣介石の捨てて行った兵站を又しても略奪することができた。

これに関連して、蔣介石は適時に我々に予告することなく、中央グループを補強するために呉鉄城の独立第1師団に出動することを命じていた。敵は中央グループを完全に壊滅したと思い、その進撃を中止して全兵力で我が第1師団に襲いかかった。我々を掩護するために敵の後方に第11師団が派遣されたけれども、それは少し遅かった。敵は第1師団によって強力な反撃を受け、その後盆地に封じ込められ、抵抗なしに我が軍の最も弱い部隊——三水グループに降伏した。この時約6000名の捕虜と彼等の装備全てが手に入った：それらは大砲15門、機関銃50丁、6~7千のライフルで、このライフルのうち1000丁以上が武装農民部隊の手に渡った。

我々は情況を子細に検討した後、師団を率いて河婆に戻り、我々が残しておいた1個大隊を前にして足踏み状態にあった洪兆麟軍を追ひ払い、戦闘なしに汕頭を占拠した。

これをもって第二次東征は終りとなった。

1925年の終りまでに、広東の東南部から敵は一掃された。1926年1月、政府軍は海南島を占拠した。

☆ ☆ ☆

第二次東征の際に国民革命軍に対して与えられた民衆の支持は十分であり、無条件であった。

決定的な役割を果たしたのは再び黄埔軍校を基礎として組織された軍隊であった：惠州攻略に際しては第4

連隊、陳炯明の主力部隊の撃滅に際しては第1師団。これらの部隊の兵士達は規律正しく、政治的にも成熟していた。

ここで政治工作を行っていたのはコミュニスト達であった。黄埔軍校の場合と同様に、第1軍の各師団に政治部が導入され、連隊、大隊、中隊の政治委員が任命された。政治工作者達の大多数はコミュニストであり、急速に兵士達の信頼を勝ち得た。

コミュニスト達は国民党組織の活動に参加し、右派の有害極まる影響から国民革命軍の成員を守った。コミュニスト達は軍に於ける革命的中核を創り上げた。

1926年中頃、国民革命軍の中に約1000名のコミュニストがいた。そしてその内の60%~70%は黄埔軍校と第1軍の中におり、それが兵士大衆を組織し、勝利に導く力となった。

第二次東征の結果、孫文が我々軍事顧問団に提案していた課題を実現する条件が備わった——その課題とは指揮、補給、戦闘訓練、政治教育を統一した原理に基いて国民革命軍を創設するのに助力することであった。

我々が仕事をした2年間は1925~1927年の絶え間なく進展していく革命という情況の下で過ぎて行った。そしてその間、軍閥達の反革命行動と戦った。

我々は絶えず国民政府の権威を強化することを配慮し、その周りに全ての革命勢力を結集することを助けた。

我々の行動の成功は常にコミュニスト達や国民党《左派》の人々との事前の広汎な仕事によってもたらされていた。顧問達は国民党内外のいろいろなグループとの辛抱強い交渉を通じて、自分達の提案を実現した。

我々が仕事を始めた時、広州には事実上、政府軍は存在していなかった。政府は軍閥の寄せ集めの軍隊に頼り、必要な時には互いに対抗させていた。

作戦行動の間、顧問は計画を作成する際にもまたそれを実行する際にも重要な役割を果たした。

指揮官が情況を判断し、然るべき決定を下し、必要な指令を発し、起こるかも知れない色々なことを予見する等の際に顧問は助言を与えた。

当時の中国人の軍事上の指導者の中には、軍事に関して全くの素人が少なかった。彼等の中にはあまりにも尊大であったり、また間違った屈辱感を持つものもあった。彼等は前以って顧問と意見を交換することを避けながら、危機的な時になると慌て、作戦を指導する能力を失ってしまった。しかし大部分の将校達

は第一次東征の後、顧問達の軍事的知識の深さを確信するようになった。

私個人の場合、作戦問題、軍事及び政治訓練に関する私の提案はことごとく何応欽將軍を通して実行した。しかし、例えばB.A. Степановは作戦問題に関して蔣介石と鋭く衝突した。大抵の場合、蔣介石は顧問が提案した必要な方策を妨害しようとし、戦場へ自分の部隊を急いで出そうとはせず、他の部隊が彼に代って火中の栗を拾うことを選んだ。B.A. Степановは最大限の忍耐力を示したが、最後には自分のポストを離れると威すことさえした。しかし一般に、熱意ある將軍はそれでも完全に、あるいは部分的に顧問の意見を受け入れた。

B.K. Блюхерは作戦や軍事——政治訓練の基本的問題に関して顧問達が自己の意見を固執するよう、色々と激励した。逆に顧問があらゆる些細なことに首を突っ込もうとし、そのために中国側の指揮官との関係を駄目にしてしまうような場合には、丁度よい時に彼の誤ちを指摘したり、また時には他の部署に移したりした。

顧問の活動の主要なものは部隊や機関に於ける日常の仕事であった。顧問はできるだけ詳しく軍の状態を調査し、幹部や兵士大衆を深く知ろうと努めた。また部隊の軍事訓練や様々な訓令の作成に積極的に参加した。しばしば顧問は將校達に講義をしたり、実地課業を行った。我々同志の提案は殆んどの場合、無条件で受け入れられ、実行された。

私が既に述べたように、兵站関係の諸問題は一層複雑であった。そこでは指揮官達は大いにデリケートな態度を示した。というのはそれが彼等の個人的な収入に関係したからであった。彼等は補給や財務関係等々の事では我々と話し合うのを丁重に避けた。

顧問達全員が組織化と管理の統一的原理に基いて、軍を集中化する方策を実現しようと努力した。

中国共産党は当時、数の上では大きくはなかったけれども、党の影響は国民革命軍の中に最近創られた部隊の中で極めて急速に成長した。党の影響が深く及び、全ての兵士達を捉えた部隊では確実に軍事上の成功が得られた。

住民は国民革命軍が広東省東部に戻って来るのを熱烈に歓迎した。あらゆる所で集會が持たれた。私は汕頭や潮州のような重要な都市で、住民と軍隊と一緒にあってデモを行っているのを目撃した。

革命が進展していくに応じてますます多くの顧問が

必要となった。新たに到着したメンバーは次の通りであった：内戦の英雄であり後に対独戦の英雄ともなったM.Г. Ефремов (Абнольд), Иван Василевич (Яновский), Н. Корнеев, М. Нефедов, Ф. Котов (Катюшин), П. Лунев, В. Акимов, 政治顧問団長の線からはE.Иолк, 通訳M. М. Абрамсон (Мазурин), Вера Вишнякова, Галина Кольчугина。北方へ派遣されたのはアカデミー東方学部出身の私の学友И.М. Ошанин, А.Я. Климов等々であった。

第二次東征が終結した2ヵ月後、私は祖国へ向かった。ソ連と中国の同志達は私が広州へ発つのを暖かく見送ってくれた。それから汕頭へ行き、そこで私の代りに任命された同志Зильбертに第1軍顧問の任務を引き渡した。1月の終りか2月の初め、私は北京經由でソ連へ発つことになった。

私は中国人民、国民革命軍の兵士、黄埔軍校生徒、孫文の忠実な弟子、そして中国共産党に対する深い愛情を心の奥に抱いて出発した。

第2部 中国革命軍の北伐 (1926-1927)

帰国するのは早過ぎる……

私は北京で1~2週間を過すつもりでいた。気分は上々であった：過ぎ去った2年間は緊張そのものであり、時には危険な任務にもついていたけれども、今からは身も細る思いで恋いこがれていた故国へ帰ることが私のやることであった。だが、この呑気な気分が続いたのはわずか翌日の朝までであった。その日私はソ連全権代表部へ出頭した。П. Смоленчевが私に重要な情報を教えてくれた：中国南部や馮玉祥軍に於ける顧問の仕事を調査し、また中国革命に対するソ連の援助に関する諸問題を全般的に研究するために、極めて権威ある委員会が北京に到着しているという内容であった。その権威が高いことは私が党の最も有名な人物の1人A.C. Бубновがその委員長である、と言うだけで十分である。彼は当時、労農赤軍の政治部のチーフの職務を果していた。

我々は報告書を持って、大使館付陸軍武官A.И. Егоровの所へ出頭した。彼は我々にあまり注意を払うことができなかった。彼はその委員会に提出する報告書の作成を急いでいた。Егоровは後で我々と詳しく話し合いをしようと言い、また恐らく我々が委員会に呼び出されるであろうと予告した。

我々は再びこれまでの任務に戻らざるを得なかつ

た。我々は中国南部に於いて得られた膨大な経験の中で最も重要なものを総括しようと努力した。そうすることによって、その結論が委員会の財産となり得ることを我々は期待した。我々にとって大いに有益であったのは中国北部から北京へ出張でやって来た同志達との会合であつた。彼等は馮玉祥の国民軍内で自分達が果している任務について詳細に語った。

我々の方にも語るべき事が数多くあつた。この2年半の間に中国南部に、革命の更なる発展のための基盤が創設された。その際主要な役割を果たしたのはソ連の援助——武器を積んだ船と我々自身の汗と血——であつた。この間に軍閥達に対する3つの重要な戦役が勝利のうちに終結した。広東省にある広州やその他の都市で行われた内戦の過程で、買弁の武装勢力——ペーパー タイガー（紙の虎）は鎮圧された。国民革命軍は反乱を起こした楊希閔と劉震寰將軍を撃破した。2人ともかつては国民党の中央執行委員であり、また同時に雲南及び広西出身の軍閥であつた。中国南部のプロレタリアートはこの有利な状況を利用して、闘争に立ち上った。そこではすでに8カ月に渡り大規模な香港-広州ストライキが続いていた。

広東にある国民革命政府の権力を強化することに重大な意味を持っていたのはM.M. Бородинや彼の協力者の組織的な活動であつた。

建設的な政府の仕事は広州軍閥許崇智の軍隊が武装解除され、右派国民党員の胡漢民が広州を離れた後、著しく活性化した。彼等は革命の事業全てに対して主要な妨害者であつた。

1926年初めまでには、広州政府の財政状態は根本的に改善された。2年半前その収入は1カ月30万ドルだったが、今や500万ドルにも上った。

我々は南方の政治闘争の真直中にいたので、第一に功績があつたのは誰なのか解っていた。決定権を持っていたのは中国のプロレタリアートであつた。1925年6月23日に起った沙面虐殺事件の後、彼等の始めた闘争によって植民地列強が中国に押し付けていた不平等条約を、中国南部に於いては無効にさせることができた。香港—広州ストライキは英国帝国主義者が持っている地方経済に於ける支配権にダメージを与えた。とりわけ香港上海銀行の力を弱めた。国民政府の財政部長がストライキ委員会用として、1万ドルづつ定期的に、何の抗議も受けずに小切手を振出したのは不思議ではなかつた。

長年に渡って経済的荒廃と軍閥達の横暴が無くなっ

た後、広東に財政的安定がもたらされたことは地方住民の生活に好影響を与えた。それまで中国にあつた英米のジャーナリズムは香港の中国の新聞も含めて、広州では《ポリシェビキがわが物顔に振舞っている》とか、彼等はアナキストで破壊者であり、建設的なことは何もできないなどと、ヒステリックに書きたてていた。今やこうしたデッチ上げ記事の作成者達でさえも、広東ではかつてこれ程経済状態の良かったことはなかったことを認めざるを得なかつた。

軍事行動の最中、我々は軍隊と共に広東省の多くの県を訪れることがあつた。我々は中国の小作農、半小作農、小自作農の恐るべき貧困さを目撃した。1畝の面積から農民は年間わずか10ドルの収穫しか得られなかつた。M.M. Бородинの指令により農業問題を研究した同志達の計算によると、農村の働き手は小作料か税金の形で平均して生産物の65%を渡さねばならなかつた。ある地区では40にも上る種類の税金を農民から取り立てた。その中には義和団事件の賠償金も入っていた。農民は名目上わずかな土地を保有しても、殆んど何も利益を得ることはなかつた。財産はフィクションであつた。

地方有力者は自己の自警団の助けを借りてようやく農民を押えつけることができた。これは民団と言い、あらゆる人間の屑を集めてつくつたものである。それを維持するために農民から税金を集めた。その地の山賊共も農民達から定期的に金を集めた。そのために彼等は特別の用紙とスタンプさえも持っていたほどであつた。

県の長官は相変わらず広東の農村の全てのことに對して権力を持つ有力者であつた。彼等はあらゆる事を思い通りに管理していた：行政も財政も司法も。満州の清王朝の時代から今なお、実入りのいい自分の地位に留まっている者も何人かいた。省内の所々では、1911年の革命について全く聞いていなかった。国民党《左派》とコミュニスト達は県の反動派を取り替える必要があることを、勿論知っていたけれども、当時広州には基幹要員がいなかつた。長官を取り替えたところは94県のうち数県にすぎなかつた。実のところ政府は金を大いに必要としていた。

広東の村は闘争に立ち上りつつあつた。農民達は極めて素朴な綱領の下に創られた組合に大半して登録した：山賊行為からの自衛、最も初歩的な協同組合の設立等々。しかし、紳士達はいかなる型の農民組織も甘受する気がなかつた。そのために広東ではこの数カ月

間に、非常に血なまぐさい衝突が7回起っていた。

国民党側には明確で且つ深みのある農業綱領はなかった。広州政府は農村に於ける階級対立をどうにかして一時的に和らげようとしていた。ただいくつかの場合にのみ、政府は農民が大量に根絶されないよう、それを助けるために軍隊を派遣した。勿論このような情況は農村に於いて活動できる革命のオルグが極端に不足していることと関連していた。農民組合はすでに数十万の人々を有していたが、それをまとめていたのは約100名のコミニストであった。(この場合当地の農民出身ではなく市から派遣されたコミニストであることが問題である)。中国共産党のみが農村に於ける活動に関する国民党第一回大会の決議を利用した；広東で農民革命が明らかに熟しつつあることは我々のような軍事専門家であって政治工作者でないものにさえもわかっていただに拘らず、国民党員は農民の中に入っていく行かなかった。

戦いながら革命の武装勢力——国民革命軍を創設していったのはこうした政治的雰囲気の下であった。

2年前広東には、寄せ集めの、組織化されていない20万の軍閥の軍隊が存在していた。そしてそれを指揮していたのはお互いにいがみ合う何十人かの将軍達であった。今や我々は十分に戦闘力があって、ある程度団結している、21個師団から成る軍隊を持った。更に数カ月経てば、それは他の省を解放するための重大な作戦を行う準備が整うであろう。馮玉祥軍からやって来た同志達は我々が成し遂げた事柄について説明を聞き羨望した。しかし、また弱点もあった。南方では中間の指揮スタッフが不足していた。それを克服するために黄埔軍校に指揮官養成のための中央学校が創設され、蔣介石がその校長になることになった。

我々は馮の国民軍からやって来た顧問達と情報を交換し、次のような決論に達した。国民革命軍は馮の軍隊より装備が不十分で、特に火炮の点で劣っていたけれども、機関銃については大体同程度であった。それに加えて、北方人の所には我々の同志の援助で騎兵隊が創られていた。馮の軍隊はすでに7~8年前から存在しているが、国民革命軍はごく最近創設されたものであった。それにも拘らず、広州人は全体的に見て馮玉祥軍よりも弱くはなかった。中国には黄埔第1、第2師団のような近代的な師団はこれ以外に存在していなかった。無論、この事はとくに次の事実によって説明できた。南中国軍は革命の武装兵力として創設され、また広州政府はそれに膨大な資金を投じた：当時毎月の

収入5百万ドルのうち4百万ドルが軍隊に支出された。

国民革命軍の兵士に対して政治教育を広めたことには大きな意味があった。1925年7月、広州に政治部が創設された。我々はそれをモスクワの習慣通りП.В.Р. (政治部)と呼んでいた。全ての師団に先ず政治部部長が任命され、それから政治部それ自体が組織されていった。我々が出発する少し前に、250名の政治工作者が広州にやって来た。その中に約100名のコミニストが含まれていた。今やコミニスト達は各師団の中にいた。しかし古い指揮官達も国民党員も彼等を冷淡にちらちら眺めた。

実際、コミニストの数は農村でも軍隊でもごくわずかであったけれども、彼等は1人が10人分の仕事をし、革命に対する情熱に満ちていた。第二次東征の際すでに政治部は戦線に対して、多大な支持を実際に与えることができた。1925年10月だけで200万以上のビラ、パンフ、ポスターを兵士や住民達に配布した。そして革命思想の種子は恵み多き地に落ちた。広州の付近に留まっていた部隊は政治上の訓令のために、週に2、3度自分達の代表を送った。その結果、政治部は司令部よりもっと密なコンタクトを部隊と持つことができた。

無論、軍隊内で革命の宣伝を行うに際して支障がないわけではなかった。読者はすでに承知のように、右派国民党員は軍隊内でコミニスト達とイデオロギー闘争をするために、《孫文主義学会》を創った。それは孫文の思想の革命的側面と何の共通性も無いものであった。反動派の巣となったのは作戦に参加しなかった第2師団であった。何人かの古い指揮官以外にそれに入会したのは反共的な傾向のある、18~20歳の若者であった。しかし、右派国民党員のこのグループはそれ程重要なものではなかった。革命の勢力は広東省でもまたその境を越えても強固なものとなった。

当時、広州政府は広西人と協定を結んでいた。広西の将軍達は自分達の4万の軍隊を再編成するために、国民党員と共産党員を自分の所へ招くつもりであった。第二次東征の時期、彼等は南方戦線側からの脅威を解消することに決定的な役割を果たした。その南方戦線に進撃して来たのは鄧本股であった。彼等は国民革命軍を支持して自分の省へ帰って行った。

残念なことに、当時南中国の政府は馮玉祥と恒久的な関係を打ち立てることができなかった。馮将軍が張家口へ南方人の有名な指導者の一人呉鉄城将軍を招い

た時、呉はこの事に関して Николай Терешатов と腹藏なく話し合った。呉鉄城は苦情を述べた：《馮は“ドアを閉じた”政策を行っている。彼は我々の依頼に応じず国民党员を喜んで受け入れているが、それだけの事である。馮は彼等を連隊内に入れないし、軍隊内の仕事をするのを許さない。》

我々広州の顧問達は北京の外交代表部と定期的に恒久的な、信頼できる連絡が持てなかったことは言っておかねばならない。郵便も電報も英国人の手中にあった。その上、我々は仕事が非常に忙しく、北京にいる同志に定期的に情報を送る時間が無かった。顧問 Хмелев が出張で北京からやって来て次のように言ったのを私は覚えている：《資料を提供して欲しい》。しかし、広州には当時わずかに3人しか協力者が居らず、しかも彼等は爆発してばらばらに散らばっていた。十分に眠ったり休息する時間も、詳細な報告を書く時間も無かった。

1926年までには広東の財政を統一することができた。また部分的ではあるが、民生の権限と軍事上の権限を分離することができた。政府が軍の給与と補給を引き受けた。これこそ正に軍の安定した団結のための、また軍内部の反目を最終的に解消するための前提条件であった。しかし、軍団のある種の司令官と將軍達との間の利害対立は依然として一掃されてはいなかった。

М.М. Бородин は中国で働いた2年半の間に大いに外交的手腕を発揮した。また広東省に存在する勢力を色々と組み合わせたり、革命勢力を強化するために必要な決議を実行する広州の行政及び軍事指導部層の性格を考慮するなどして、才能を大いに発揮した。そして彼は物事を極めて冷静に眺め、状況や自分に許された方法を最大限に利用しようと努めた。В.К. Блюхер に代って南中国の政府の顧問団長になった Н.В. Кисанька (Куйбышев) は若干一本気の人であった。彼は次のような誤った判断をした。すでに転換期が来ている。そして南中国の軍隊内部を徹底的に中央集権化する時期が来た。また明確な任務を持ち、全体に渡る組織化がなされ、統一的な規律を持つ軍事組織に軍を従属させる時が来た。国民革命軍の建設の現段階には、まだこの先長期に渡る困難な闘争が控えているにも拘らず、Кисанька はこれをもうすでに達成したものとして見做した。だがこれは誤りであることは顧問達の経験そのものが証明した。

我々が Бубнов 委員会の出頭命令を待っている間に

数日が過ぎた。我々は後で知ったのだが、1926年2月11日、陸軍武官 А.И. Егоров が委員会で報告をした。(彼は将来のソ連の元帥であり、内戦時の有名な赤軍の司令官であった。それ故、彼の意見は極めて興味深かった。)

Егоров は中国の状況をあらゆる角度から分析し、行動の統一的計画を作成することが必要だと考えた。そのような方向を目指す試みがかつて一度なされたことが報告した。北京で会議が持たれた。それに出席したのは Карахан, Егоров, Войтинский, Соловьев そして Трифонов であった。彼等は Г.И. Войтинский が作成したテーゼを検討した。しかし事はそれ以上進展しなかった。

1926年2月14日、我々は大使館の一室で首脳部の前に立った。А.С. Бубнов に向って規則通りに軍隊式の敬礼をしようとする、彼は軽く手を振ってそれを止めさせた。彼は言った。《我々はこの間に私人として来ているので、私は Бубнов ですらなく Ивановский であることを心に留めておいて下さい。》それから彼は委員会の残りのメンバーを我々に紹介した：彼等は全ソ連共産党中央委員会委員であった。極東地区党委員会書記 Н. А. Кубяка, 勝れた組合指導者 И.И. Лепсе, 労農赤軍司令官 Лонгва で、彼はまたこの委員会の書記であった。Лепсе とは内戦の時知り合いになったが、彼は呆気にとられ、言葉に詰まった。《君はここにいたのか》。そして私を心から抱きしめた。Лонгва との出会いもこれが最初ではなかった。

委員会の到着に関連して講ぜられた予防措置はもったもなしだと我々には思えた：当時中国には、帝国主義者のスパイや白系の難民がうようよいいたので、秘密を厳密に保持することによってのみ我々の最も有能な指導者達の安全を確保することができた。

我々は А.С. Бубнов に特別の関心を持った。彼は革命前の時期にすでに党の最も勝れたオルグの一人であり、М.В. Фрунзе と共に地下活動で Изванов-Вознесенск 市の労働者の団結を求める勇敢な闘争を指導し、再三逮捕されたことを我々は知っていた。1917年、彼は十月武装蜂起や冬宮の占拠を指導した5人組の一人であった。内戦時に彼は革命軍事会議のメンバーとして赤軍の多くの作戦、特にウクライナ解放のための闘いを指導した。最後にクロンシュタット反革命反乱の鎮圧に参加し、わずか5年前のことであるが赤旗勲章を受けた。

会心の始めに、我々は中国の政治全般にわたる諸問題に関して自分達の見解を、若干支離滅裂に且つ性急

に委員達に述べ始めた。無論、栄冠はニロフとН. Терешатовのものであった。というのは、彼等二人は顧問団長М.М. Бородинのスタッフだったので、これらの問題に充分精通していた。Терешатовは広州に到着した後、すぐに、黄埔軍校からБородинのオフィスへ行った。ニロフの方は一時的にそこにいただけであった。

Бубновは初めのうちは我慢強く全てを聞いていたけれども、そのうちとても如才なく話を遮り、黄埔軍校の訓練活動はどうなっているか尋ねた。Бубновは軍隊内の政治工作者の指導者であったので、軍事問題プロパーについても日常的な軍隊内の生活についてもよく知っていることが分った。この質問に対して主に答えたのは私であった。間もなく会議の主要な方向が明確になった。

第一に委員達の関心を引いたのは国民革命軍による北伐の可能性であった。この問題に関してニロフとТерешатовは異った意見を述べた。ニロフは2~3カ月後に国民革命軍の3~4万の兵士が華中の軍閥に対して出撃でき、北京を解放することさえ可能だと断言した。Терешатовもまたはっきりと述べた：《現状ではどうあっても北伐を行うことはできない》。彼の意見によると、北伐を行う前に長い準備期間が必要である。つまり広東省及び隣接の各省で約1年間政治活動を行い、武器と食糧を十分に貯蔵し、財政資金をつくることである。Терешатовは次のように考えた：北方に堅固な根拠地を築くためには、黄埔軍校のような軍事教育の核を持たねばならない。そのような革命のセンターを創らねばならない。たとえそれが1~2年顕著な結果を生み出さないとしても、(黄埔軍校は8~9カ月間は《無であった》)、後になって自分の役割を果たすであろう。

Бубновは非常に注意深く顧問達の意見を聞き、彼のとても美しい、大きな青い目で、話している人を見つめていた。北伐はそもそも議題に取り上げるだけの価値があるか、という彼の質問に対して、Терешатовは肯定的に答えた。

ニロフとТерешатовの両者が北伐を実行することに関連して一連の貴重な意見を述べた。ニロフは獲得した地域を恒久的に確保しておく問題に注意を向けた。そしてまたその地の状況に極めて独特な且つ固有な一つの危険を指摘した。それは撃破された軍閥の膨大な軍隊が国民革命軍に編入する可能性であった。そのような部隊は革命の訓練を経験していないので、後方地域で明確な脅威となるであろう。

ニロフは広西の革命政府の前に開かれた可能性を広く利用するよう要請した。彼の意見によると、国民党員、コミュニスト及び我々顧問達をそこへ派遣すれば、3~4カ月で広州と同じような状況を形成することが恐らく可能であろう。

ニロフは既してとても楽観的な気質の人物であった。わずか1カ月後に蒋介石が広州に於いて第一回目の反革命クーデター、1926年5月20日の有名な事件—中山艦事件を実行しようとは、勿論当時、我々の誰も予測することができなかった。しかし、ある者は事態を一層注意深く捉え、一方ある者は問題ないと考えた。ニロフは疑いもなく後者に属する一人であった。中国の唯一の規律ある軍隊が広州に集まっている、と彼はきっぱりと言った。《たとえ軍団の指揮官が十分に信頼できないとしても、(だが今のところ彼らを当にすることができる)彼の下にいる部下達は政府に反対はしないであろう、ということは政府にははっきりわかっている。今や軍隊内には隠れた反対者は存在しない。ましてや表に現われた反対者は存在しない》。現実がこの判断を覆した。しかしながら、間違えたのはニロフ唯一人ではなかった。

А.С. Бубновは北伐全般に対する態度を決めた後、北伐が進んでいく結果引き起こされるかも知れない一連の極めて重要な状況の分析を、我々から得ようと努めた。何よりも彼の関心を引いたのは呉佩孚が撃滅された後、国民革命軍と馮玉祥軍が遭遇する可能性であった。Бубновは次のように警告した。馮は南方人の敵となるかも知れない。そして、いずれにしても国民軍の中で、赤軍が内戦の時期にバルチザン部隊の中で実施したような政治革命教育を真剣に行わなければならないであろう。

Н. Терешатовは馮の軍隊が国民革命軍と遭遇した後2週間のうちに、その敵となるであろう、と確信を持って述べた。《だがもし、馮の軍隊にここ、北方で政治教育を施したらどうであろう。》とБубновは尋ねた。《そうなれば事情は違ってきます》とНиколайが答えた。馮玉祥軍の中に黄埔軍校を卒業した者がおり、彼等をアジテーションに使うことができると彼は言及した。Терешатовは力説した：たとえ馮の軍隊との衝突が避けられたとしても、やはり国民革命軍は更に前進して行く前に、占拠した地域に根拠地をつくらねばならない。Бубновは具体的に尋ねた：《もし南方人が北方中国に根拠地を持つとしたら、張作霖と休戦協定を結ぶ必要があるだろうか。》《必ずやらねばならない》と

Николай は断言した。

Бубнов は帝国主義者が反動派を支持する目的で、中国の内政に干渉する可能性について我々の意見を知らたがった。Терешатов は香港の英国人が極めて近い将来、広州の革命派に対して何らかの行動を取るだろうと推論した。《香港は先週から全く以前とは言葉使いが変わってきた》と彼は述べた。2月4日、現地の総督は広州を非難する声明を出した。その翌日、シンガポールからやって来た英国の水兵が図々しくも広州に上陸し、示威行進を行った。日本の新聞に、衝突が起った場合には日本は英国人を支持するという挑発的な叫び声が上った。

Бубнов は再び質問した。《香港から直接広州を攻撃することはあり得ないだろうか》。我々同志達の意見は様々であった。Нилов の答えは否定的であったが、Терешатов は彼の意見に同意しなかった。帝国主義者は直ちに攻撃することが十分可能であると彼は述べた。その連中は6月の平和的なデモに向かって射殺することを厭わなかった。Николай は香港の大ストライキが始まった後、軍艦と飛行機30機が到着したという事実で委員会を注目させた。英国人達は華中の最大の軍閥の二人——吳佩孚と孫傳芳に同盟を結ばせることによって、反動勢力を結集させることに努力を傾注した。А.С. Бубнов は一連の具体的な質問に対して詳細な回答を得た後はじめて、一般的な問題の分析に戻った：《今や、民族—革命運動の将来性に関して、我々は夏には革命の波が大いに高まるのを見たが、今は風の時である。次の発展段階はあるだろうか。そしてもし、前途に新たな高揚があるとしたら、商人やブルジョア上層部はどんな風に振舞うだろうか。運動の階層分化が起こるだろうか。》Нилов の意見は国民革命軍が北方へ進撃するに依じて、革命運動は発展するというものであった。しかし、北伐それ自体は高揚を引き起こさないであろう。大衆、特に農民の間に可能な限り広汎な宣伝活動を準備することが必要である。

Н. Терешатов も革命が勃発する可能性と北伐とを関連づけていた。彼は次のように述べた。ジャーナリズムから判断すると、上海では軍閥に対して全体的な不満が増大しつつある。大商人でさえも彼等の専横と不法に苦しんでおり、そして帝国主義国家の政策もまた社会全体の憎悪を引き起こしている。

Николай はとても特徴的なエピソードを委員会に語った。顧問達が黄埔軍校の中国人教官達に記念の写真を撮るよう提案し、彼等を日本人の写真館へ誘った。

それに対して友好的な拒否の返事が戻った。誰一人として日本人の所で写真を撮りたがらなかった。

私は今、委員会の仕事に参画したことを思い出して、はっきりと満足感を味わっている。何故なら、その後続いた事態が私の推論を一部裏付けることになった。私は自分の見解を述べた：北伐を始めると国民革命軍は揚子江までは比較的容易に進むことができるであろう。しかしその後、帝国主義列強は共同戦線をつくり、結束して革命軍に対抗し出動するであろう。馮玉祥もまた恐らく、国民革命軍の敵となるであろう。この段階で、軍隊の大規模な再組織化の作業が必要となるであろう。恐らく、以前の軍閥の部隊は離脱するであろう。

私は北伐を進めて行く際に、南方政府が農民を決起させるために何らかの政治スローガンを引き出さねばならないだろうと考えた。当時私にはすでにはっきりわかっていたことだが、統一された国民革命戦線の弱点は的確な農業綱領を持っていないことであった。軍隊を補給するという重荷を全て担っている農民に対して、何も与えないというのは許されるべきことではなかった。《国民党第二大会で、М.М. Бородин は小作料支払いを軽減するスローガンを通そうと努めた——地主の土地を没収することは問題にならなかった——が、国民党员の賛同が得られなかった。私はまた《南方》と《北方》の顧問達の間に、恒常的な連係が無いことを指摘した。我々は広州にいた時、馮玉祥の所で何が行われているのか、ほとんど知らなかった》。時折、わずかに10名ぐらいの黄埔軍校の卒業生が張家口へ送られ、彼等を通して若干の情報を何とか手に入れることができた。だが、馮玉祥の所にいる顧問達は、彼等の説明から判断すると、我々が広州に滞在した初期に犯したのと同じ仕事上の間違いをしていた。

А.С. Бубнов は尋ねた：《広東からの情報は何か、時機を失して入って来るのか。》Терешатов は答えた。《広東の状況は、我々全員が疲労困憊し、足を引きずってやっと任務を果す程で、送り出せる者は一人として残っていなかった。》

会見の終りに、我々は顧問の任務を組織化する問題と、顧問の中国での滞在期間の問題を審議した。Терешатов は顧問が軍事面で、急速に向上している赤軍の指揮官に遅れないように、顧問をもっと度々交代させることに賛成した。私はこの観点には反対せざるを得なかった。私の考えでは、最初に中国にきた顧問達の中の少くとも数人はここに留まらなければならな

い。仕事をしたこの2年間に、我々が当地の事情をよく知るようになり、中国の指揮官達と緊密な関係を結んだのは確かであった。そして、彼等と共に3つの戦役を戦い抜いた。小隊長の中の何人かは連隊長まで昇進したのを、我々はこの目で見た。新たにやって来た顧問達は全てのことを改めて最初からやり始めなければならないであろうし、また我々がすでに持っているのと同じ権威を手に入れるために、多大の努力を傾注しなければならないであろう。顧問達が遅れをとらないように、時々本国の野営召集や短期コースへ、彼等を送り出すべきである。

私の述べた意見が委員会のメンバーの意見と明らかに一致したことを言っておかねばならない。ともかく、A.C. Бубновは別れ際に、我々が喜んで本国に帰ろうとしていることに当惑している、と卒直に言った：《統一した革命軍の建設のために恒久的な基礎を築き、各方面からその功績を認められ、中国で働く顧問をもっと多くするよう我々に求められているまさにこの時に、諸君はどうして帰国する準備をしているのか》。

Бубновは、開封の現状を分析し、南方で蓄積された戦闘経験を開封の顧問グループに伝えるために、そこにある岳維峻の国民第二軍の所へ行くよう私に提案した。そうなると、私は北京で休息した後、広州へ戻らなければならなかった。私はしばらくこの提案をよく考えさせてくれるよう頼んだ。《多分、本国へ急いで帰らなければならない理由が何かあるんだろう》と Бубновは関心を持って尋ねた。私は次のような理由がある

ことを認めた。私は出国前に入党が認められていたけれども、地区委員会で正式に手続きをとる時間的余裕が無かった。そこで、すでに5年目になっているにも拘らず、相変わらず党员候補にすぎない。Бубновは微笑して答えた：《この問題は私が解決しよう。貴方が本国へ帰ったら、貴方の在党期間が今日のこの会見の時から始まるように、中央委員会に私が要請しよう》。

我々は満足感を抱いて、会見が行なわれた部屋を離れた。我々はБубновの意欲に強い印象を受けた。彼は党の以前からの活動家の一人であり、幸運にもレーニンの薫陶を受け、また中国の事情や我々がこの国で行ってきた事の長所や短所を真に深く洞察することができた。委員会のメンバーは最大の注意を払って、我々一人一人の意見に耳を傾けた。私は我々が一連の有益な考えを述べることができたと感じている。その考えは後に、中国革命を援助するためのソ連の広汎なプログラムを実現させることに役立った。

私は中国解放の諸問題に対して、我が党がいかに深い関心を持っていたかを示すために、先ず第一に我々とБубнов委員会との会見を上記のように詳しく取り上げた。確かに、我々は帝国主義国家を表象する軍事顧問のタイプ、即ち、金のために働く傭兵には似ていなかった。我々一人一人にプロレタリア国際主義の思想が浸透していた。まさにこの故に、我々は中国で熱心に働き、中国人民が直面している複雑な課題の本質をできるだけ深く洞察しようとした。この事はまた、ある程度委員会メンバーとの会合に反映していた。